

農林害虫防除研究会 Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

## News Letter No.12

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.12

2003 年 12 月 26 日

※研究会所在地：静岡大学農学部生物生産科学科

〒422-8529 静岡県静岡市大谷 836

ホームページ：<http://www.affrc.go.jp:8001/agroipm/narc.html>

### 巻頭言

## 害虫の適応力

廿日出 正美（静岡大学農学部）

当大学の平成 16 年度推薦入学試験小論文問題に「25 年後の日本農業について感想を述べなさい」を出題しました。受験生の答案の中から小生にとって特に印象に残ったのは 25 年後の日本農業はあらゆるハイテクとバイオテクノロジーを駆使し、安全で豊富な農作物の自給自足ができる大勢に発展しているだろう。なかでも病虫害に強い抵抗性をもった遺伝子組み換え作物の育成により、農薬による防除は不用になるだろう。果たしてその様な都合の良い夢物語が実現できるだろうか。日本の技術革新の速度、人口の出生率、農業従事者の減少と高齢化を勘案しても、逆に日本農業はかなり厳しい時代に直面しているのではなかろうか。我々が扱う害虫問題を 1 つ取り上げても、遺伝子組み換え作物で抵抗性問題が解決できるだろうか。小生が 25 年前衛生害虫を扱っていた時、合成ピレスロイド(ペルメトリン)や IGR 剤ダイミリン(ディフルベンズロン)が登場した時、内心これら殺虫剤に対して抵抗性昆虫は未来永劫出現することはないだろうとも思いました。し

かし、数年にして各国から抵抗性昆虫の報告がなされ、小生自身体験しました。旧清水市三保海岸地区の施設園芸地帯でイエバエの大発生が続き、発生源は有機質配合肥料でありました。そこでこの肥料の中に数 ppm のダイミリンを混合し、メロンや野菜を栽培しました。僅か 1 年で三保半島からイエバエが姿を消し、農家や住民から大喝采をあびることができました。しかし、4 年後一地域からイエバエの発生が確認され、慌てて現地のイエバエを採集して、数種 IGR 剤、有機リン剤及びピレスロイド剤で殺虫試験を実施しましたが、総ての薬剤に強い抵抗性を獲得しており大きなショックを受けました。これを契機にいかなる合成殺虫剤に対しても抵抗性昆虫は出現するものと認識をあらたに致しました。

従って、彼らが言う夢の農作物が登場したとしても、恐らく昆虫の適応力から推察すれば、数年後には農作物を加害し、農薬や天敵の力を借りなければ農作物の安定供給はできないのではなかろうか。

現実には日本農業を取り巻く環境は大変

厳しいものがあり、異常気象、農薬問題、食の安全性等々、難問が積算しております。幸にして、この農林害虫防除研究会はこれら難問を解決すべく、英知と技術を駆使して多くの方々が努力されているようにお受けいたします。また、本会は発足以来、年々盛会を極め、産官学民の会員の皆様が

一同に会して、忌憚のない意見を交換しており、他の学会にない特徴を備え、円満に運営されております。この度、本会の会長という重責を仰せつかり、内心不安ではありますが、立派な幹事の皆様のご協力を得て、本会発展のため、務めさせていただきます。

## ニュース

### イネタテハマキを探索して

平井一男(農業生物資源研究所)

イネタテハマキ *Cnaphalocrocis exigua* (Butler), Japanese rice leafroller は本州、四国、九州、種子島、屋久島(石原, 1970), 東南アジア(持田, 1998) に分布している。成虫は翅を横に開いて止まり、コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis* (Guenee), rice leafroller, rice leaf folder ほど鱗縁が黒化していない。そして老熟幼虫は黄橙色になると記されている(筒井, 1972)。辛いことであるが自分で見たことのない昆虫類について執筆したことがある。今年、イネタテハマキの観察の有無について筆者が専門家 10 数名に聞いたところ、幻の昆虫との意見もあったくらい最近観察した人はいなかった。そこで平成 15 年 8~10 月に埼玉県内(桶川市)の畑水田(都道府県別メッシュコード 5439-0427)でイネタテハマキの発生の有無を調査した。観察結果:平成 15 年は埼玉の観察水田で平年に比べコブノメイガが多数発生していた。しかし採集したメイガ類はすべてコブノメイガでイネタテハマキではなかった。確認のためメイガ類の分類専門家である京都府立大学の吉安裕博士に、埼玉の畑水田で 10 月上旬に採集した成虫♀20 頭♂20 頭をお送りしご確認していただいたところす

べてコブノメイガであった。

ところで 1996 年以来宮崎県延岡市の海岸でコブノメイガやシロオビノメイガなどの移動性蛾類の飛来状況を調査している宮原義雄氏(2002)の私信によると、今年は 6 月 24 日までコブノメイガはの飛来はわずか 3 頭であったが、翌 25 日に大量飛来があった。飛来のパターンとしては 6 月から多飛来した 1998 年に似ている。1 日目の飛来数は 3 倍の 93 頭で、8 年間を通じ日当たり飛来数としては最大とのこと。

今年、埼玉でもコブノメイガは例年(2~3%のイネ被害株率)に比べ多発した。水田では(いずれも 100 株調査)8 月 17 日は 1%の被害株率であったが、9 月 6 日は 6%, 10 月 12 日は 60%に増加し成虫も多数飛翔していた。コブノメイガの飛来数は韓国でも多かったとの専門家の情報が寄せられた。

同じ水田ではイネツトムシの発生も多く、8 月 17 日は被害株率は 60% (主に終齢幼虫), 9 月 6 日は 65% (主に蛹~成虫), 10 月 12 日は 100%に増加した。

観察稲の栽培概況:7 月 6 日 150 m<sup>2</sup>の畑水田に、イネ(朝の光)を稚苗機械移植し無肥料無農薬栽培。9 月 3 日出穂。10 月

19 日収穫。収穫量(精玄米)は 55kg と少なめ。その他の昆虫は多い順にツマグロヨコバイ 1 穂 10 頭(9 月 6-7 日)。アカヒゲホソミドリカスミカメ(7-9 月)、イトトンボ類(7-9 月)、イネクロカメムシ(7 月)の発生を確認した。さてイネタテハマキについて観察したことのある方、ご一報願います。

#### 引用文献

- 石原保 農業昆虫大要第 5 版 養賢堂(東京) pp.310.  
 宮原義雄(2002) タテハモドキ 38.32-44.  
 持田作(1998) コブノメイガ, 熱帯稲作の病虫害, 国際農林業協力協会(東京) pp.124.p.96-97.  
 筒井喜代治(1972) 原色・作物害虫防除第 5 刷, 家の光協会(東京) pp.205.

## 殺虫スペクトル

守谷 茂雄(東京都)

横書きで「旧中山道」と記されたボードを「イチニチジュウヤマミチ」と読んだ女性アナウンサーがいたとのこと、落語のようですが、実話だそうです。このような常識外の話は別としても、私たちも気付かずに誤った読み方をしていることがあります。No. 9 に寄せられた京都農研の岡留さんの「浸漬」をなんと読む? を拝見したときはショックでした。自分でも使っていた読み方で、思いこみの恐ろしさを痛感しました。これは学会の用語集でも「しんせき」としているのです、発音しなければそのままと言うことでしょうか。

殺虫スペクトルは英語の insecticidal spectrum に対応する日本語です。これを「殺虫スペクトラム」と読む人、また同じように記した日本語の論文もよく見受けます。スペクトルは光のスペクトルなどで知られているように物理学用語として確立されている言葉で、フランス語の spectre を語源としているようです。因みに英語の複

数形は spectra です。7 色に分けられる太陽光のスペクトルのように、いくつかの成分に分割、並べられるという現象を援用して抗生物質の抗菌スペクトルなどが使われるようになりました。その後、農薬でも、殺虫、殺菌、殺草スペクトルなどが使われています。殺虫剤では、属、種だけでなく、目の異なる種間での比較にもスペクトルを使う例をよく見受けます。このような場合には、スペクトルと言うより、作用範囲、作用(領)域などの表現の方が適切ではないかと私は考えております。しかし、日本語は難しいですね。外来語をカタカナで表記して使える日本語は便利でもあり、不便でもあります。・・rum という語尾を・・ラムと表した外来語もあります。新しいカタカナ語が街に溢れ、物忘れのひどくなった年配者はその対応に戸惑いを覚える昨今ですが、spectrum はやはり「スペクトル」と表してほしいと思っております。

## ユニバーサルデザイン

太田 泉(野菜茶業研究所)

私の職場では時々、近隣の農家の方などから「持ち込み」の相談がある。虫や病気の被害を受けた作物を持参し、原因の特定や対策を求めてくる。アポなしで突然来られることが多いため、対応に苦慮することも少なくないが、できうる限りのことはしている。ある時、高齢の農家の方が来られて、「キャベツにアオムシ(おそらくコナガ)が出て困っており、農協からこの薬を勧められたが、本当にこれで良いのか？」と未開封の農薬のビンを書き出した。見れば、数年前から出回り始めた新しい農薬であり、当人には見慣れない殺虫剤だったのだろう。ラベルにはキャベツのコナガが明記されていたので、「この薬で大丈夫です、十分効くはずです。」の一言で、納得して帰られた。当初、「ラベルを読めばわかるのに……」

と少々いぶかしく思ったが、しばらくして、「もしかして、ラベルに書かれてあることが読めなかった(もしくは内容が理解できなかった)のかもしれない」と思うようになった。農薬のビンや袋には必ず使用方法や注意事項等の表示があるが、印刷されている文字はどれも小さいうえ、やや専門的と思える用語も散見される。また、農薬の希釈もごく簡単な算数ではあるけれど気を遣う作業だ。

近年、ユニバーサルデザインという考え方が世の中に少しずつ浸透し始めている。農業の担い手の高齢化が叫ばれるようになって久しいが、農薬という商品にも、より使いやすい(高齢者に優しい)工夫が求められているのかもしれない。

## ‘虫屋’の中に‘病理屋’が一人♪♪♪

森田孝延(大塚化学株式会社)

現在、私は農薬メーカーに勤務しており、仕事内容は「普及(技術)担当」と言う、いわゆる‘何でも屋’です。農薬メーカーと言っても元々飲料・食品が事業の中核であったため、新参者的な農業分野に関しては些か節操がなく、その商品構成は農薬・肥料・資材・切花延命剤等と多岐に渡っており、仕事は主力商品の関係上、殺虫剤に偏重しているのが現状です。ここで問題なのは私が元々‘病理屋’だと言うことです。広く‘作物保護’と考えたと‘虫屋’や‘病理屋’と区別するのは時代遅れなのですが、今で

も「生涯殺菌剤一筋！」と公言してはわかりません。本研究会においても、心の奥底では‘虫屋’の中に‘病理屋’が一人♪♪♪的な気持ちでしたが、最近ちょっと面白いことがあります。昨年上市した殺虫剤のスペクトルが予想以上に広く、幾つかの病害にも登録を取れる可能性が出てきたからです。殺虫剤ではあるけれど、徐々に殺菌剤としての適用を充実し、将来はラベル上で害虫の名前より病気の名前の方が多くなる……これがささやかな‘隠れ病理屋’の夢です。

## 続・ハスモンヨトウ明石海峡を渡る

八瀬順也(兵庫県立農林水産技術総合センター)

タイトルに「続」がついている訳は知る人ぞ知る。知らない人は後で分かる。

明石海峡大橋は世界最長のつり橋である(つり橋のランキングは中央径間—主塔間の距離—で決められる。明石海峡大橋の中央径間は1991m)。神戸と淡路島を結ぶ橋梁部分の長さは3.9km、2本の主塔の高さは283mある。今シーズン(2003年)、この海を跨ぐ巨大な構造物にハスモンヨトウ(以下ハスモン)のフェロモントラップが設置されていたことはご存知だろうか。

海や橋の鉄骨からハスモンが発生することはあり得ない。仮に橋の中央部でハスモンが捕れたとすれば、それは最低でも2kmの距離を飛んで来たということだ。ハスモンの飛翔能力からすればそのくらいやすいだろう。興味があるのは、その季節変動が分かれば単なる採集記録より少しは上等な、つまりハスモンの地域間の動きを経時的に示すデータになるのではないかということである。

このプロジェクトはぼく自身が言いだしたことだが、最初から真面目にこんなことを考えていたわけではない。「なぜ山に登るのですか?」と質問された登山家が、一般の人が期待する言葉で説明するのと似ている。実際のところ彼はその山に登りたかったから登ったのだし、ぼくは「そこに明石海峡大橋があったから」トラップを仕掛けようと思ったのだ。設置に至るまでの紆余曲折は、書けば長くなるのでここでは省略する。橋を管理する本州四国連絡橋公団はとて好意的だったし、ぼくが所属する組織もそれなりに寛容だった、とだけ言っておこう。

トラップは橋の管理用通路(一般車道の

一層下、海上50~70mぐらい)に沿って、橋梁部をほぼ6等分する位置にあたる5カ所に設置された。5月に設置を済ませ、はじめは半月に一度、8月からは毎週、12月まで通った。管理用通路は車も通れるが、そのための車両用エレベータ使用料が1回¥4~5万と聞いて車の使用はあきらめた。ついでに言っておくと人用エレベータもあって、その使用料が1回¥4,000ぐらい。結局、調査のためにビル7階相当の昇降と通路往復の6.6km(最後のトラップまでは片道3.3km)を徒歩でこなさなければならなかった。ちなみに、ぼくがこれまで橋上を歩いた距離を全て足すと150kmにはなる。

ぼくの予想以上にハスモンはたくさん捕れた。今結果をまとめている最中なので詳しいことはまだ言えないが、どうやらヤツらは日常的に神戸、淡路双方から海峡を渡っているらしい。以前(2000年)ぼくは淡路島北部の山頂からハスモンのマーク虫を放し、明石で再捕獲したことがある(これが元祖“ハスモンヨトウ明石海峡を渡る”)。この時は台風の接近—通過という非日常的な気象条件に裏付けされた移動だったが、このようにハスモンの長距離移動はもっぱら北方向に向かうものと考えていた。だから、淡路島や明石のハスモンは『もともと四国のハスモンヨトウ』というスケープゴートを作り上げたのだが、それを自らの手で崩すことになるとは・・・特にT県さんには申し訳なかったと思っている。

準備期間を入れると2年を費やしたこのプロジェクトは今シーズンで終わり、今のところ来シーズンの予定はない。1シーズンだけのデータでは物足りないのは確かだが、ぼく一人がお膳立てしている今の状況

では限界がある。こうしてシーズンを通してデータが得られたのも、全くのボランティアで調査を手伝ってくれた大勢の方々のお陰であることも付け加えさせていただく。こういう仕事が生かせる共同研究は組めないものだろうか。

実は今回オオタバコガのフェロモントラップも設置していたのだが、どういう訳か 1 匹の捕獲もなかった。単にトラップの捕

獲効率が悪いというだけでは説明できないレベルにあると思う。全く飛んでいないか、飛んでいるとすれば高さが問題なのだろうか。そこで、次に狙っているのは橋の主塔にトラップを仕掛けること。ここのエレベータ代も相当高いはずなので、やはり徒歩で行くことになると思う（筆者注：一度本四公団から却下されている）。

## 「本当に大切なこと」

工藤 宇(アグロカネショウ(株)研究部生物課)

ある雑誌で高校野球の監督さんが「野球ばかりを教えていたのではチームは強くない。むしろ、野球以外のことをどう教えていくかが大切なこと。」だと話していました。これは野球に限ったことでなく、私たちの仕事にもいえることだと思います。私たちもいいもの（いい農薬）を生み出そうと日々、試験を重ねているわけですが、試験ひとつをするのにも、じつに多くの人たちに支えられています。例えば、室内である虫の試験をします。当然、その虫の飼育管理や供試作物等が必要になりますがそれらは試験担当者だけでできること

ではありませんし、実験器具や実験場所も限られている中で多くの人が試験をするわけですから、当然お互いに譲り合ったりしなければなりません。このように、1 人の人が一つの試験をするだけでも多くの人に支えられていることを忘れては本当の意味で「いいもの」は生まれてこない。私たちにとって試験をすることが仕事ですからその結果も大切です。でも、実は仕事以外の大切なこともたくさんあるのです。私たちにとってそれが「本当に大切なこと」かもしれせん。

## ペルーのハモグリバエ

大泰司 誠 (近畿中国四国農業研究センター)

本年の 6 月、北海道、山口県から相次いで *Liriomyza huidobrensis* (アシグロハモグリバエ仮称) の発生予察特殊報が発表されました。本種は南米原産とされておりますが、筆者は 1988 年から 2 年半、ペルーで

本種にふれる機会がありました。近年はインターネットで最新の情報が得られるため、また古い話なので皆様の参考になるか疑問ですが、本種についての経験を思い出しながら書いておきます。

場所はペルー太平洋沿岸の南緯 11 度、標高 120m の本来ならば熱帯域なのですが、寒流の影響で 11 月から 5 月の夏期でも平均気温 20~25°C 前後、6~10 月の冬期の平均気温は 15~20°C 前後です。年間を通して月別の最低気温は 12°C~23°C、最高気温は 22~28°C の極めて安定した気温条件の地帯です。この地帯における *L. huidobrensis* は 4 月、5 月になると発生が認められるようになります。この時期の黄色トラップによる誘引数は 10 頭/日程度でその後徐々に増加して 9 月、10 月に誘引数は 4 月、5 月の 10 倍程度で最多となり、11 月、12 月には急減するという発生パターンを示していました。これがすべて温度条件によるものかどうか不明ですが、発生の始まる 4 月、5 月は最高気温が 25°C 以下に、平均気温が 20°C 以下になる時期です。また、急激に減少する 11 月は最高気温は 25°C 以上、平均気温が 20°C 以上になる時期でした。

ウリ科、ナス科野菜については幼苗期の被害は大きいのですが、栽培時期が主に夏であるためそれほど被害は多くありませんでした。アブラナ科野菜は刺痕は多く認められたのですが、潜葉被害はさほど多くありません。最も被害が大きかったのは冬期に栽培されるエンドウ、ソラマメ、セロリでした。とくにソラマメは潜葉された葉は黒変して落葉します。現地での防除薬剤はもっぱらシロマジンが利用されており、高い効果を示しておりました。安価であるためカルタップも散布されておりましたが、効果は不明です。また露地の育苗期の防除試験において、シルバーテープの処理が効果があったように記憶しております。

我が国において本種が今後どのように分布・被害を拡大するかわかりませんが、比較的気温の低い時期に注意する必要があるかと思えます。

## 自覚と無自覚

山口力雄 (日本農薬株)

「アリが嫌い」と言う中学 1 年生の娘。「何故、嫌い」と聞いても、「何となく」との返事。いつから嫌いになったかも「わからない」らしい。TV にアリの画像が出ると目を背け、部屋から出てしまう。昆虫はその形態、色彩、生態の多様性故に虫に慣れていない子供には異物感、恐怖感を与える要素があるのだろうか。子供の「虫嫌い」が顕著になったのは、幼稚園以降で、保母さんや小学校の先生に女性が多いことも影響したのではないかと邪推してしまう(私の周りには虫好きの女性は少ない)。父親の

努力の甲斐もなく、子供は自覚もないまま「虫嫌い」を大人達から植え付けられつつ育っている。

最近、TV で「体に優しい」あるいは「体に安全」をアピールした食品の CM が多くなっている。「農薬を使わない有機栽培」という決まり文句で、有機合成農薬に対する暗黙の「仮想敵」扱いがなされており、「虫嫌い」に通じる部分がある。「疑わしきは排除」の「島国根性」はまだまだ根強く残っており、個々の自覚と理性的判断が日々問われている。

## イラクサギンウワバの分布拡大やキンウワバの話題

野村昌史(千葉大学園芸学部)

2000 年頃から西日本のキャベツ圃場を中心にイラクサギンウワバ *Trichoplusia ni* が同じ亜科に属するタマナギンウワバ *Autographa nigrisigna* に代わって発生するようになってきました。両種の間では一部農薬の効き方にも差があるという結果も得られていますので、単に虫が変わったという問題ではすまされないかもしれません。

我々の調査では春先ではタマナギンウワバの発生が多いですが、秋にかけてイラクサギンウワバが多くなります。しかし翌春はまたタマナギンウワバの方が多くなっています。この発生量の違いの原因を明らかにすること、また根本的にはなぜイラクサギンウワバが圃場に進出し、害虫化しているのかという謎を解き明かすために現在調査、研究を進めています。

各地の試験場の方と連絡を取り、調査をさせていただいていますが、幼虫はタマナギンウワバとほとんど変わらないため、イラクサギンウワバの発生はほとんど気が付かれておらず、調査に先立って行ったアンケート調査でもイラクサギンウワバの発生は無いとしているところが多かったです。しかし調査した多くの地域でイラクサギンウワバは発生しており、今秋は千葉県でも発生が認められました。

今後、この分布拡大がどうなるのか継続調査を行うとともに、西日本を中心に再度アンケート調査を行って、イラクサギンウワバの発生に注意していただこうと思っています。皆さんのところにもアンケート用

紙が届くと思いますが、是非回答していただき、この新害虫の実態を明らかにしていきたいと思っています。

また、圃場に発生しているウワバ類の同定も行いますので、下記まで送付していただけるとありがたいです。イラクサギンウワバはキャベツ以外ではブロッコリー、ダイコン、ハボタンなどアブラナ科作物をはじめ、レタス、ゴボウ、キク、トマト、ピーマン、ニンジン、オクラでも被害が認められ、この他にキヌサヤやナス、ショウガにも加害が認められているきわめて広食性の昆虫ですからどんな圃場や施設のものでも結構です。どうぞお気軽にお送りください。

〒271-8510 松戸市松戸 648

千葉大学園芸学部 応用動物昆虫学研究室  
野村昌史

イラクサギンウワバについての記述は植物防疫 2003 年 4 月号の拙稿をご覧ください。もちろん別刷りを差し上げます。

イラクサギンウワバのほかにもいろいろなキンウワバ類が圃場や施設に発生しています。このキンウワバ類に寄生するキンウワバトビコバチの発生生態についても最近調査しています。このハチは卵に寄生して終齢幼虫が吐糸した際に急激に発育します。ですから幼虫を送っていただければ寄生の有無がわかりますので、よろしくお願いたします。



## 農薬が変わってきたことをもっとアピールしよう

浜村徹三(野菜茶業研究所)

農薬ほど人間の役に立っていないながら、悪者扱いを受けている物も珍しいと思います。終戦後アメリカから入ってきたパラチオン、テップ等の猛毒農薬は、事故死、自殺などが相次ぎ、強烈に悪い印象を与えました。その後DDT, BHC, ドリン剤など半減期が長い薬剤が土壌残留, 水質汚染, 生物濃縮などの環境問題を引き起こし, 最近では環境ホルモンというあいまいな悪役に引き継がれて, マスコミにたたかれ続けてきました。その間も農薬は文句も言わずに病害虫の防除に使用され, 食糧生産に多大の貢献をしてきましたが, その辺のプラスの評価はマスコミにはほとんど取り上げてもらえません。抑えて当然のリリーフエースがヒーローになれないプロ野球の世界に似ています。たまに失敗するとボロクソです。

最近, 天敵と農薬の関係を調べていて, 農薬自体が大きく変化していることを実感します。私が研究を始めた頃(35年ほど

前)はチリカブリダニに影響のない殺虫剤はBT剤の1種類だけでした。今はIGR剤を中心に10種類以上の殺虫剤がカブリダニに影響ありません(BT剤の15種類は除いてです)。これは農薬メーカーが, いかに選択性, 低毒性をターゲットに農薬を開発してきたかを物語るもので, 敬服に値すると思います。このように農薬自体が安全な方向に大きく変化してきていることを世の中もマスコミも認識していません。我々病害虫防除の研究に携わっている者も, 個々の剤では理解していても全体としては案外認識していないと思います。かく言う私も薬剤を並べてみてハッと気づいた次第です。「農薬=毒」から「農薬=安全」へ変化してきたことをもっとアピールする必要があります。

(2003年12月で会長任期が終わります。皆様ご協力有り難うございました。)

### 第19回常任幹事会議事録

日時: 2003年6月26日 10:30~11:45

場所: 日本大学生物資源科学部 資料館第1会議室

出席者: 浜村徹三, 江村 薫, 廿日出正美, 正野俊夫, 本敦司, 林 直人, 平井一男, 河野義明, 春山裕史, 萩原保身, 久保田栄, 宮田 正, 井上雅央, 田中 寛, 増田俊雄, 二口欣也, 丸山宗之, 松淵定之, 佐藤泰典, 根本 久, 今埜隆道, 廣森 創, 古橋嘉一, 後藤哲雄, 阿久津四良, 本山直樹, 池山雅也 (順不同, 敬称略)

1) 第18回大会(2002年12月18日)の議事録 承認された。

2) 第8回大会について

阿久津常任幹事より以下の説明があった。事前参加申し込みが216名, キャンセル3名があり, 213名の参加の予定。(会員: 128名=59.3%, 非会員: 88名=40.7%。都道府県関係=37%, 国・独法=8.8%, 大学=10.2%, メーカー他=44%)

3) 事業及び会計関係

総会資料に基づき、廿日出事務長及び会長より説明があった。昨年大会時入手した入会金 2 万円がニュースレター費用に回されたが、この件は次年度会計処理することとした。その他は問題なく了承された。

#### 4) ニュースレターNo. 11 の紹介

増田担当より内容の紹介があった。自主投稿は無く、すべて依頼原稿。今後啓蒙していくこととした。前回の幹事会で、製品紹介についての取り決めを行ったが、次号から“製品紹介コーナー”を設けることとした。担当者 1 名は大変であり、数名でワーキンググループを創ってはその提案があり、検討していくこととした。

#### 5) 2004 年～2005 年度役員について

原案通り了承された。ただし、ニュースレター編集担当は、2 年間の約束があり、交代の時期であるが、現在新担当者が決まっておらず、決まり次第交代することを条件に増田氏とすることとなった。奈良県の常任幹事は井上氏から、井村氏に交代する旨の表明があった。他にも交代の可能性はあるが、発生に応じて会長が指名する。

#### 6) 第 9 回大会開催地について

今回は高知県で受けてもらい、現在のところ 2004 年 6 月 17-18 日の予定であることが会長より紹介があった。

#### 7) その他

①生態工学会から、本研究会に“生態工学シンポジウム”の協賛依頼があり、会則 3 条の一環として、受けることを決定した。金銭的な要請は無く、参加者の会費が安くなるという特権がある。この件は、総会で報告する。今後こうした事柄は幹事会で決定する。幹事会開催が間に合わない場合は、メール会議で決めることとした。

②今回の大会報告（書）について、今回から新たに以下の項目を記載した旨の報告が阿久津幹事よりあり、了承された。 ・奥付け ・通し番号 ・過去の大会の発表概要 (文責：池山)

### 平成 15 年度農林害虫防除研究会総会記録

日時：2003 年 6 月 26 日 17:20～17:45

場所：神奈川県藤沢市亀井野 日本大学 生物資源科学部、本館 4 階大講堂

司会を副会長の池山雅也氏が行い、会長の浜村徹三氏を議長として議事等が進められた。

1. 平成 14 年度（平成 14 年 1 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日）の事業報告及び収支決算報告が事務長の廿日出正美氏よりあり、会計監査報告の後、承認された。
2. 平成 15 年度（平成 15 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日）の度事業計画及び予算案が事務長より提案され承認された。
3. 常任幹事、都道府県幹事の一部改選の提案があり了承された。
4. 次年度（平成 16 年度）は会長、副会長の改選年度であるので、前例に従い、常任幹事会で候補者を選出し、総会で承認を得た。午前中（6 月 26 日）の常任幹事会で協議された、会長：廿日出正美氏、副会長：二口欣也氏、江村薫氏、の案が提案され承認された。
5. 生態工学会主催のシンポジウム「農業害虫の光による物理的防除（2003 年 10 月 17 日）開催」について、会長宛に協賛依頼があり、承諾する説明がなされた。
6. 来年度（2004 年）の大会を 6 月下旬に高知県で行うことが提案され承認された。 (文責：江村)

### 農林害虫防除研究会会則

## (名称)

第 1 条 本会は、農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳を Agricultural Insect Pest Management Society of Japan (略称 AIPM Society of Japan) とする。

## (目的及び事業)

第 2 条 本会は、農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い、会員相互の知識の高揚と親睦を通じて、農林業の発展に寄与することを目的とする。

第 3 条 本会は、目的達成のため次の事業を行う。

(ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換 (オ) その他必要と認められるもの

第 4 条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

## (会員)

第 5 条 本会の会員は正会員、賛助会員とする。

第 6 条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。

第 7 条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を 2 年間滞納したときは退会したものとみなす。

## (役員等)

第 8 条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1 名 2. 副会長 2 名 3. 常任幹事 25 名前後 4. 事務長 1 名 5. 都道府県幹事 47 名 6. 会計監査 2 名 7. ニュースレター編集担当 1 名 8. 情報担当 1 名

第 9 条 役員任期は 2 年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第 10 条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第 11 条 本会役員を選出方法は以下の通りとする。

(ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考し、総会で承認を得る。

(イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第 12 条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

## (集会)

第 13 条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年 1 回、通常、大会期間中に開催する。大会は毎年 6～7 月に行う。

## (会計)

第 14 条 本会の経費は会費，寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第 15 条 本会の会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり，翌年の 3 月 31 日に終わる。

(付則)

第 16 条 本会則の変更は総会の議決による。

第 17 条 1. この会則は平成 8 年 6 月 22 日から施行し，一部改正を平成 13 年 6 月 28 日に行った。

2. この会則の一部改正は平成 14 年 6 月 28 日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い，会計年度を以下の通りとする。

平成 14 年度は平成 14 年 1 月 1 日から平成 15 年 3 月 31 日，平成 15 年度は平成 15 年 4 月 1 日から平成 16 年 3 月 31 日，平成 16 年度以降は同様 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日。

### 農林害虫防除研究会役員名簿(2002～2003 年)

会長：浜村徹三

副会長：池山雅也，江村 薫

常任幹事：阿久津四良，井上雅央，久保田 栄，河野義明，後藤哲雄，今埜隆道，小林政信，正野俊夫，  
田中 寛，根本 久，萩原保身，春山裕史，廿日出正美，林 直人，平井一男，二口欣也，  
古橋嘉一，宮田 正，本山直樹，増田俊雄，松淵定之，丸山宗之，山本敦司

事務長：廿日出正美（会計担当補佐：廣森 創）

会計監査：西東 力，上遠野富士夫

ニュースレター編集担当：増田俊雄

情報担当：竹内博昭

(2003 年，12 月 1 日現在)

### 農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿(2002～2003 年)

| 都道府県名 | 氏 名   | 都道府県名 | 氏 名   | 都道府県名 | 氏 名    |
|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 北海道   | 中尾弘志  | 青森    | 川嶋浩三  | 岩手    | 藤沢 巧   |
| 宮城    | 増田俊雄  | 秋田    | 新山徳光  | 山形    | 上野 清   |
| 福島    | 大沢守一  | 茨城    | 上田康郎  | 栃木    | 小山田浩一  |
| 群馬    | 千本木市夫 | 埼玉    | 根本 久  | 千葉    | 上遠野富士夫 |
| 東京    | 小谷野伸二 | 神奈川   | 阿久津四良 | 山梨    | 村上芳照   |
| 長野    | 萩原保身  | 新潟    | 中野 潔  | 富山    | 村岡裕一   |
| 石川    | 笠島 哲  | 福井    | 高岡誠一  | 岐阜    | 山田偉雄   |
| 静岡    | 久保田栄  | 愛知    | 滝本雅章  | 三重    | 大谷一哉   |
| 滋賀    | 小嶋俊彦  | 京都    | 岡留和伸  | 大阪    | 柴尾 学   |
| 兵庫    | 足立年一  | 奈良    | 井上雅央  | 和歌山   | 森下正彦   |
| 鳥取    | 伊澤宏毅  | 島根    | 奈良井祐隆 | 岡山    | 近藤 章   |
| 広島    | 林 英明  | 山口    | 和泉勝憲  | 徳島    | 中野昭雄   |
| 香川    | 松本英治  | 愛媛    | 萩原洋晶  | 高知    | 高井幹夫   |
| 福岡    | 堤 隆文  | 佐賀    | 菖蒲信一郎 | 長崎    | 大久保宣雄  |
| 熊本    | 行徳 裕  | 大分    | 徳丸 純  | 宮崎    | 黒木修一   |
| 鹿児島   | 井上栄明  | 沖縄    | 谷口昌弘  |       |        |

### 研究会への入会方法

事務長(廿日出正美, 静岡大学農学部生物生産科学科, 〒422-8529 静岡市大谷 836, Tel & Fax: 054-238-4826, E-mail: abmhatu@ipc.shizuoka.ac.jp), または会計担当補佐(廣森 創, 所属&郵便アドレス同上, Tel & Fax: 054-238-4825, E-mail: ahihirom@ipc.shizuoka.ac.jp)までお知らせください。News Letter と振替用紙(郵便振替: 農林害虫防除研究会 00810-0-82999)をお送りします。年会費は 1,000 円です。事情により退会の場合, また所属・郵便アドレス等変更の場合も上記までお知らせください。

### 会員のみなさまへのお知らせ

農林害虫防除研究会ニュースレター編集担当からののお知らせです。News Letter No.12 から、「製品関連ニュース」のコーナーを新設しました。今回は記事がありませんでしたが、奮ってご投稿ください。字数は 200 字以内で、製品の名称と企業名を必ず入れてください。内容は自由ですが、競合する商品に対する誹謗、中傷はやめてください。あくまでも、自社の製品紹介という範囲に留めるようお願いいたします。

### 編集後記

News Letter No.9 から No.12 までの編集は、宮城の増田が担当しました。No.12 を合わせ、この2年間に原稿をご執筆いただいたみなさまには、心から感謝申し上げます。振り返ってみますと、この2年間は植物防疫関係者にとって激動の時代であったと感じます。無登録農薬の使用、農薬取締法の改正、ラベル誤表記、県基準の誤記載などなど、様々な問題が一気に吹き出しました。その影響を受け(言い訳のようですが)、News Letter の発行が遅れてしまったこともあり、会員のみなさまにご迷惑をおかけしました。しかし、News Letter に掲載された記事は、どれも読み応えのあるすばらしい内容であったと思います。No. 13 から No.16 までは茨城の横須賀知之さんが担当されます。横須賀さん、よろしく願います。最後に、私はお金の管理がどちらかというとダメな方なので、私の同僚の宮田将秀さんにお金の出し入れをお願いしました。この場を借りてお礼申し上げます(隣りに座っていますが、口に出すのは恥ずかしいので・・・)。

No.13 は 2004 年 6 月に発行予定です。No.13 の編集は横須賀さんをお願いしますが、投稿は増田も受け付けます。あなたやあなたの所属機関の仕事や問題、害虫の話題、本会のポリシーなどについて自由に、気軽に楽しく書いてください。エッセイ、ノート、ほか、どんな形式でもかまいません。字数の目安は 400 字程度ですが、字数にこだわる必要はなく、200 字でも 1,000 字でも OK です。同じ人が続けて投稿するのももちろん OK です。

投稿方法は、(1)電子メール直接書き込み、(2)電子メール添付ファイル、(3)フロッピーディスク郵送、(4)手書原稿ファックス・郵送、の順に歓迎します。手書原稿でも全く遠慮はいりません。ワープロソフトは、Windows 版の(1)Word、(2)一太郎、(3)Ms-Dos テキスト、を歓迎します。投稿時のスタイルは、1 ページ行数・1 行文字数等自由ですが、カタカナは全角、英数字は半角、句読点は「、。」、にしてくださいと助かります。カットや写真も大歓迎です。「by あなたのあな名」を付記します。「各種研究会等のお知らせ」も受け付けますので、ご利用ください。農林害虫防除研究会 News Letter は、前編集担当の田中さんの方針を引継ぎ、「現場から基礎までのあらゆる井戸端情報が飛び交う舞台」を目指しています。メンバーのみなさん、どうぞよろしく願います。

編集担当: 増田俊雄

(宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部虫害チーム, 〒981-1243 宮城県名取市高館川上字東金剛寺1, E-mail: masuda-to794@pref.miyagi.jp, Tel: 022-383-8125, Fax: 022-383-9907)

次期編集担当: 横須賀知之

(茨城県農業総合センター農業研究所病虫研究室, 〒311-4203 茨城県水戸市上国井町 3344, Tel: 029-239-7211, Fax: 029-239-7306)

## \*\*\*\*\* ニュースレターNo.12 (2003 年 12 月発行) 目次 \*\*\*\*\*

## &lt; 巻頭言 &gt;

害虫の適応力 (廿日出正美) ----- 1

## &lt; ニュース &gt;

イネタテハマキを探索して (平井一男) ----- 2

殺虫スペクトル (守谷茂雄) ----- 3

ユニバーサルデザイン (太田 泉) ----- 4

虫屋の中に病理屋が一人 (森田孝延) ----- 4

続・ハスモンヨトウ明石海峡を渡る (八瀬順也) ----- 5

本当に大切なこと (工藤 宇) ----- 6

ペルーのハモグリバエ (大泰司 誠) ----- 6

自覚と無自覚 (山口力雄) ----- 7

イラクサギンウワバの分布拡大やキンウワバの話題 (野村昌史) ----- 8

農薬が変わったことをもっとアピールしよう (浜村徹三) ----- 9

第 19 回常任幹事会議事録 ----- 9

平成 15 年度農林害虫防除研究会総会記録 ----- 10

農林害虫防除研究会会則 ----- 11

農林害虫防除研究会役員名簿 (2002~2003 年) ----- 12

農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿 (2002~2003 年) ----- 12

研究会への入会方法 ----- 13

会員のみなさまへのお知らせ ----- 13

編集後記 ----- 13